

第4章 夏の地区予選大会

夏の地区予選大会がとうとう幕を開けた。墨谷二中は前年度優勝校ということでシードされ、今日の四回戦からの出場となった。そしてライバル青葉学院もともに今日の四回戦から登場した。

4・1 青葉学院対川中

記者B「たかが、地区予選だっていうのに人が多いね。」

記者A「そりゃそうよ。今日からいよいよ第一シード校青葉学院と墨谷二中が登場するんだからな。」

球場では青葉学院と川中とが対戦していた。青葉学院の先行で始まり三回青葉学院の攻撃中だった。

観客A「相手じゃないね。」

観客B「まるで、おとなと子どもだ。」

記者A「しかしすごいね。あれで青葉は二軍だっていうんだからな。」

それもそのはず、青葉学院は対戦相手をよせつけず、一回には四点、二回には二点、そしてこの三回も相手投手から連続ヒットを打ち続けているところだった。

記者A「よっ、墨谷二中の登場だぞ。」

丸井「やあ、しばらく!」

記者A「なかなか調子がよさそうじゃないか。」

丸井「まあまあってとこですよ。」

記者A「きくところによると、三十六校と練習試合をやって全勝したんだってね! それくらい、そうとう力をつけたってうわさでもちきりだよ。」

丸井「いやあ、なにになに。ところで青葉はどうなんです。」

記者A「あいかわらず、地区予選は二軍におまかせだよ。」

丸井「なるほど。」

記者A「それよりちよっとごらんよ。ほらあそこ。」

顔見知りの新聞記者が指さした方向には青葉一軍の選手達が試合を観戦していた。

記者A「一軍は報道陣をいっさいシャットアウトして猛特訓していると聞いていた。練習時間をさいてまでここにきているところをみると…。どうやらマトは君たちのようだな。」

丸井「うらやましいね。層があついと。じゃあ着がえてきますから。」

記者A「がんばれよ!」

丸井がナインの先頭に立って更衣室に向かおうとしたその時だった。観衆が一斉に歓声を上げた。後方にいた墨谷ナインがおもわずグラウンドを見た。

丸井「どうしたんだよ。」

島田「青葉にスリランホームランがでたんです!」

丸井「ぐずぐずしてねえで、はやくこねえか!」

加藤「キャプテン、いちおう見といたほうがいいんじゃないですか!」

丸井「バーロー。おれたちや二軍と試合するんじゃないねえっ。」

加藤「は…は…いい。」

あまりにもぐずぐずしていたナインに大声で丸井は声をかけた。その声に観戦していた青葉一軍選手達も墨谷二中に気がついた。

小室「お…おいっ。き…聞こえちゃったらしいな…。」

小室が青葉一軍の変化に気がついた。

中野「うちの二軍もなめられたもんだぜ。」

佐野「そうとう自信があるんだろうよ。」

4・2 球場更衣室で…

丸井を先頭に墨谷ナインは更衣室にはいり着がえをしようとしていた。

丸井「よし、このへんで着がえるか。」

島田「キャプテン。江東中じゃないですか。」

島田が指さす方向には対戦校らしきチームが着がえていた。

丸井「そうらしいな、ちょっとあいさつしてくるからよ。」

丸井「江東中さんですね。」

江東捕手「はあ。」

丸井「墨谷の丸井です。どうぞおてやわらかに！」

江東捕手「い…いえ、こちらこそよろしく。」

丸井「じゃあおたがいにがんばりましょうや！」

江東捕手「ど…どうも。」

丸井は簡単なあいさつをして墨谷ナインのところに戻っていった。

島田「そう強そうなチームにはみえませんか。」

丸井「まるで相手じゃないね。」

近藤「じゃ、かつちよくコールド勝ちといきまっか。」

丸井「…。バーローなめんじゃねえ！ みかけはどうあろうと三回戦を勝ちぬいてきたチームなんだ。」

イガラシ「まあまあキャプテン、きょうのところはおれにまかせてもらえませんか。」

丸井「えっ…。」

墨谷ナインが着がえをしているところに部屋のドアが開いた。

審判「試合が青葉の三回コールド勝ちで、はやまったけど用意はいいかね？」

遠藤「は…はあ。」

丸井「また、ずいぶんはやいな。おっいこうぜ。」

4・3 墨谷二中对江東中

墨谷ナインがグラウンドにはいると待ちかまえていた応援団から大きな声がかかった。

「フレ！、フレ！、すみや！ フレッ、フレッ、すみやー。」

それを見ていた対戦校の江東中応援団も負けじと声を出した。

「かーて、かーて、こうとう！ かて、かて、こうとうー。」

江東中B「勝て勝て江東だつてよ！」

江東中C「なんとか勝ちたいもんだな。」

江東中D「しかし、もしここで勝ちゃあ大金星だぞ。」

江東捕手「バカヤロウ。そんな弱気じゃコールドゲームで負けちまうぞ。なんとか九回までもたせるんだ。」

江東中D「はあ……？」

試合前の両チーム並んでのあいさつが終わり、後攻の墨谷ナインは守備位置にちっていった。先発の近藤が投球練習を開始した。

イガラシ「調子いいじゃねえか、近藤。」

近藤「は、はい。」

イガラシ「今日はおまえの好きなように投げていいぞ。」

近藤「ほ…、ほんまでっか！でもキャプテンさんが…。」

イガラシ「心配するな。おまえのことはすべて、おれがまかされてんだから…。」

近藤「イガラシさん…。」

イガラシ「よせよ、気持ちわりい。」

近藤「よ…ようし！」

近藤はイガラシの「好きなように投げていい。」の言葉をうけて、力いっぱいボールをキャッチャーの小室に向かって投げこんだ。

「プレイボール！」

試合が開始された。

近藤の投球は^{あつかん}圧巻だった。三人を三球三振。江東中もただ打席に立っているだけではなく、バットを短く持ちそしてバットをねかせてタマを当てにきたが、近藤の投げたボールは思っていた以上に速かった。

江東中C「こ…これじゃ点をいれるどころじゃねえな…。」

江東捕手「うわさには聞いていたが、まさかあれほどのピッチャーだとは思わなかったぜ…。」

「ストライク！ バッターアウト！ チェンジ！」

「いいぞ近藤！っ。ナイスピッチング！」

応援席からも近藤の投球の素晴らしさに声がとんだ。そして観戦中の青葉学院選手達も…

青葉捕手「はやいな。」

佐野「うむ。」

二軍投手「はやいことははやいですが、ど真ん中ばかり投げるなんて、ちょっとあらっばくないスカ、先輩。」

佐野「あの調子ならおまえら二軍に手がでないタマでもあるまい。」

二軍投手「そ…そうスカね。」

佐野「たよりねえ返事だな。」

墨谷二中は近藤の活躍で簡単に一回の表を0点におさえた。

4・4 陰険な野球

一回裏墨谷の攻撃に変わった。

丸井「さあ攻撃だぞ。」

丸井はとなりにすわった近藤に気がついた。

丸井「シナロー、三球三振なんてかっこうつけやがって！」

近藤「へへ…。」

丸井「さあ、たのむぞ高木！」

高木「は…はいっ。」

イガラシ「いいタマおもいきって打っていこうよ。」

一番高木はピッチャーの初球をセンター前に運んだ。

「ナイスバッティング！ いいぞ高木ーっ！」

応援席からも声がとんだ。

小室「たのむぞ加藤。」

イガラシ「一発、かましてやれっ。」

加藤「ようし。」

丸井「イガラシ、どうしたってんだ…。」

イガラシ「はあ。」

丸井「いくら相手が江東だからって、こういうばあいは確実にバントでセカンドにおくるべきじゃないのかよ。」

「カーン」

「やったーっ」

丸井がイガラシをつかまえて話をしていたが、加藤は初球を引っぱりライト前にクリーンヒットを打った。一塁ランナーは三塁まで進塁した。

丸井「ランナー一塁、三塁か。ま…ヒットでたんじゃ文句もいえめえ。へへ…スクイズでまず一点いただきだな。イガラシ、サインをたのむぞ。」

イガラシ「キャプテン、今日のところはこまかいこといわないで一発大きいのかましてやったら。」

丸井「タ、タイム…。おいイガラシ、いったいどうしたっていうんだ！ さっきの近藤の三者三球三振といい、どういうつもりなんだ。てめえすこし江東中をなめすぎてるんじゃないのか。」

イガラシ「いや…そういうつもりじゃないんですがね。おれたちの試合ぶりを青葉に見られてるんですよ。」

丸井「それがどうしたってんだ。いいところをみせてやろうじゃないか。」

イガラシ「それがバカ正直ってんですよ！」

丸井「バ、バカ？」

イガラシ「さっきも新聞社の人がいったでしよ、青葉の一軍は報道陣をシャットアウトまでして猛練習をしてるってのに、なにもおれたちのプレイぶりをすっかりさらけ出すこともないでしょう。」

島田「そういや、そうだな。やつらには二軍がいるからいいようなもののこっちにはいねえからな。」

丸井「だけどなんだい。さらけ出すの、ださないのでスパイごっこじゃあるめえし。おれはきらいだねそういうの。」

イガラシ「おれだつてすきでやってるわけじゃないですよ。しかしあいてがあいてだし、そんなきどつてられる場合じゃないんですよ。だいたい勝負つてものにすききらいをはさむものでもないでしょうに。」

丸井はイガラシの作戦をなかばあきれて聞いていた。

イガラシ「いいですかキャプテン。われわれには日本一になるって目標がありましたよね。それに…。」

丸井「わかったよ！ 打ちゃいいんだろ、その陰険いんけんな野球つてのをやってやろうじゃねえか。」

丸井は初球の高めのボール球をおもいきりスイングした。しかし丸井は空振りしバランスをくずしてたおれこんでしまう。

イガラシ「キャプテン、いまのは完全にボールですよ！」

丸井は二球目もおもいきりスイングした。快音を残して打球はライトの金網をこえていった。「やったーっ、スリーランホームランだ！」

イガラシ「すごい、あたりでしたね。」
丸井「フンだ。」

「かつとばせーつ、かつとばせーつ、いーがーらーしー。」
墨谷二中は結局一回の裏六点をあげた。

4・5 墨谷快進撃

中村「しかしハデに打ったね！」

青葉捕手「まったく…。」

二軍投手「でも、こんなにあらっばいチームだったら、おれたち二軍でも勝てるんじゃないか。」

二軍三塁「うむ…。」

二軍投手「ねえ先輩、地区予選はなにも先輩たちの手をわずらわすこともないと思うんですが。」

佐野「てめえら、そろいもそろってどこみてるんだ。」

二軍投手「は…はあ。」

佐野「やつらは、おれたちに手のうちをみられねえようにしてこれだけ一方的な試合をしてんだぞ。目のタマかつぼじってよく、みとけ！」

二軍三塁「は…はい。」

この日も、近藤はさえたつた。近藤の投げるタマはことごとくキャッチャー小室のミットに吸い込まれていった。

二回の裏の墨谷二中の攻撃は目をみはるものがあつた。完全に相手投手のボールをみきわめ、バッターボックスに立つバッターは相手投手のタマをことごとくジャストミートした。みかねた主審がホームベース上で塁審を集めた。

主審「どうだろう、これいじょうつづけてもしようがないんだと思うんだが…。」
塁審「まあ、むだでしょうね。」

ホームベース上で審判団が協議を開始した。

主審「どうかね、きみ。まだつづける気はあるかね？」

江東捕手「い…いえ結構です。」

主審「じゃあ、全員整列させて。」

江東捕手「は…はい。」

突然に整列の合図がかかった。

島田「どうしたってんだ？」

高木「まだ二回のそれも途中だったのによ。」

「16対0で墨谷二中のコールド勝ちとする！」

4・6 青葉部長の決意

墨谷二中の試合が終わると同時に青葉部長が立ちあがった。

青葉部長「さあ、いくぞ。」

青葉一軍「は…はいっ。」

青葉ナインは墨谷の予想以上の力におどろきをおどろけなかった。

佐野「しかし、手のうちをみせないで二回コールドとはすごいですね。」
青葉部長「そのやつらがわれわれにまともにぶつかってくるわけだ…。しかしおもったいじょうに力をつけたもんだ。」

青葉部長は球場通路で顔なじみの新聞記者に呼び止められた。

記者A「部長さん、しばらくです。」

青葉部長「やあ。」

記者A「どうでした墨谷を観戦した感想は？」

青葉部長「感想といわれても、まともに戦ってない墨谷をどうこういえんよ。」

記者A「そういえば、そんな試合ぶりでしたね。」

青葉部長「ただ、きょうの試合から察すると昨年よりも力をつけたことはたしかだ。」
記者A「ほほう。ということは、昨年おたくをやぶったときの墨谷より強くなってるということですか！」

青葉部長「そうでもなけりゃ、この青葉が予選ごときにめくじらたてて特訓などせんよ。」

記者A「な…なるほど。」

青葉部長「まあ墨谷にしろうちにしろ、どっちが勝ったにせよ、全国大会の優勝のカギをにぎるといっていいだろう。」

記者A「ゆ…優勝のカギ…。す、すると青葉としては墨谷との予選が事実上の日本一をきめる試合とみてるわけですね。」

青葉部長「うむ…そういうことになるな。ただし、負けやせん！ 昨年のこの大会で青葉に唯一の黒星をつてくれた名譽のばんかいのためにもな！」

青葉部長は顔なじみの記者の質問に墨谷二中に対するなみなみならぬ決意をあらわにするとともに、打倒墨谷二中を強く思うのであった。

そして全国中学野球地区予選大会の日程はすすんでいった。青葉は名門の名のとおりに二軍で勝ちすすんでいった。一方三十六校の強豪との練習試合に全勝した墨谷も、四戦五戦と戦いぬいてきたチームを苦もなくほうむり、破竹のいきおいで勝ちすすんでいった。そして地区予選ながら墨谷二中と名門青葉学院とのあいだで、事実上の日本一をかけた決戦をむかえたのであった。